

超絶過激な批評集

『杉中昌樹詩論集 野村喜和夫の詩』 は、野村喜和夫を終わらせるだろう

平居 謙



0 現代詩史における野村喜和夫

1人の詩人について1冊の本をまとめるということは大変なことだ。情熱も知識も、時間も愛情も必要だろう。その意味では詩人論に限らず価値のない書物なんてあり得ない。しかし、この『杉中昌樹詩論集 野村喜和夫の詩』（2017年7月 七月堂刊）はそういう一般的なレベルを超えて面白い。「よくやってくれました」的な感動もある。

本書の一番面白いところは、最終章「野村喜和夫はどこから来たか—『野村喜和夫の詩』総論」である。なぜ最初にこれが来なかったのかはあとから触れるが、実際そんなことはどうだっていいほどにまで面白い。

ここには、野村喜和夫の系譜が様々な形で「試論」される。

一つには神話や異界・幻夢といったキーワードを軸として考えた場合の、祖としての吉増剛造。また、「引用」という方法論の観点における祖としての入沢康夫。そのそれぞれの間に吉田文憲を以下のように差し込むことができると杉中は言う。

吉増剛造→吉田文憲→野村喜和夫
入沢康夫→吉田文憲→野村喜和夫

また、大地との親和性ということに注目した場合（ここにも吉田文憲の名前が現れるが）、その祖は遠く宮澤賢治に至るというのだ。つまり以下のような図式。

宮澤賢治→吉田文憲→野村喜和夫

僕は宮澤賢治と野村喜和夫を結びつけたことがたった一度もなかったもので、ほんとうに驚愕したのだった。また、エロスという主題や、大学院で渋沢孝輔からランボーを学ん

だことから

ランボー→金子光晴→渋沢孝輔→鈴木和成→野村喜和夫

という線も提示している。なるほど、大学で学ぶということは確かに文学観には強く関わってくるだろう。しかしそれが、創作上の「師」ということになるのか、研究上の「師」なのかは少し異なる印象がある。俳句における「師系」という発想のことを思う。そして最後に、これは杉中自身の思いとして

谷川俊太郎→野村喜和夫

という線が加わって来ることを彼は期待している。そのキーワードは「分かりやすい詩」というものである。つまり著者は結局のところ野村の詩の「分かりにくさ」が克服されればよいと考えているのだ。

さて僕は先に「なぜ最初にこれが来なかったのかは後で述べる」と書いたが、改めて考えてみると理由は明らかだ。この最終章に書かれているほとんどのことは、有機的に本文に絡んでいない。つまりこれは「総論」ではなく、「あとがき」或いは「あとがきとしての放談」に近いタイトルがつけられるべきものだからだ。また、それぞれの言説に説明が少なく、直感の域を出ないからだ。最初に全体論的に据えるものとしてではなく、杉中自身が野村のそれぞれの詩集を丹念に読んでゆく中で出てきた試論なのだろう。しかし、それだからこそ面白い。直感的であるからこそ大胆な、細部を切り捨てた図式が提示できるとも言えるのだ。

さて、以下本稿では『杉中昌樹詩論集 野村喜和夫の詩』について、僕の感想をいくつか述べてみたいと思う。

1 野村喜和夫の「読まれなさ」

『杉中昌樹詩論集 野村喜和夫の詩』が送られてきた時、まさに野村喜和夫についての適切な解説がちょうど読みたいMAXのところには僕は居たので、一気に読み進めた。

野村喜和夫について考えてみたいと感じたのは、今年（2017年）4月、僕が司会進行を務める「知る詩る」（主宰 山村由紀）という読書会で野村喜和夫を扱ったばかりだったからだ。そしてそれに関わって、あることを思い出したからであった。

読書会「知る詩る」は、毎回1人の詩人、あるいは1冊の詩集をテーマに、十数人が集まって2時間ほど討論をする会だ。詩の書き手も多く、僕の感触では「いい感じで詩が好きな人が集まっている」という感触を持っている。ところが当日、誰一人「面白かった」「読んでよかった」という人がいなかったのがあった。「文学ど素人」の集まりならいざ知らず、八木重吉を再読し、アポリネールを読み、吉増剛造を論じ、吉原幸子を批評し、菅原克己を味わい、と何度も経験を重ねているメンバーがである。古い参加者などは、何年かの中絶はあるものの2001年から継続的に参加し続けてきた人々も少なくない。その彼らの誰もが「苦しかった」「何が評価されているのかよく分からない」と言うのだ。そしてそのことで思い出した「あること」というのは次のようなことであった。

上記読書会の直前の3月、「Tricky Queen」という詩の合評会のために上京していた絶妙のタイミングで、同人誌「Dawn Beat」のミニシンポジウムに参加した。そこでは、小川三郎や金井雄二ら「Dawn Beat」のメンバーたちがこれまで読んできた現代詩集を中央のテーブルに展示しつつ、それについて語るのだった。その時、一参加者として感想を求められた僕は「自分の読んできた吉増剛造やねじめ正一といった詩人たちにまったく触れられていないことに驚いた」旨の発言をしたのを覚えている。同人誌

「Dawn Beat」の傾向から言ってそれはとても納得ゆくことだったのだが、彼らのリストの中にもそう言えば野村喜和夫は顔を出していないのだった。

実は、僕は野村喜和夫その人は嫌いではない。2000何年だったか、辻元よしふみさんプロデュースの池袋ライブハウスの朗読会で一緒のステージに立ったこともある。僕が編集した若い書き手のために解説を頼んだこともあった。また長谷川竜生を囲む新薬師寺での泊まり込みの朗読&シンポジウムイベントでは、野村喜和夫、萩原健次郎、松尾真由美と一緒に僧坊の一つ部屋に雑魚寝のように寝たっけな。雑魚寝の翌日には、彼はわざわざ奈良の新薬師寺から京都まで足を延ばして、詩の販売・交流イベント「ぼえむバザール」に立ち寄ってくれた。

人物だけではなく、彼の詩集に関しても、『反復彷徨』には思い出がある。上に記したことがらよりもずっと前、『反復彷徨』をご本人から頂き「これが最現在の現代詩かー」という感慨を感じたこともあった。好き嫌いを超えて「刷り込まれた世代」と言えるのかもしれない。次の詩はその当時、一番印象に残った箇所だ。

しかし、私と杭とのほんとうの出会いは、たぶんそんなふうではなかった。ディスクールめくそんな出会いではなく、ディスクールの果てにあるそんな予定調和めく杭ではなく、もっと別の出会い、別のルート—今ではもうあまりよく憶えていないのだが、わたしはその時バスに乗っていたのだろう、しかも渋谷駅から出るバスではなく、どこか他処から渋谷駅へと至るバスに。そうしてバスは、NHK放送センター—ガラス張りの巨大なルービックキューブの上いきらめくメタル状の蜂の巣を頂くあの内気なメディアの城を遠巻きに、ようやくゆるゆると墓碑パルコ三基のふもとあたりへと近づいていたまさにその、ふと私の眼に、それ、つまり一国木田独歩住居跡と書かれた杭が飛び込んできたのだろう。それが始まり。

(あ、たんにひとつの杭)、といえはいえたかもしれない。しかしそれだけでは終わらなかった。いまの何？何だった？私はすでに問を絡ませていたし、その杭の文字に目を奪われた一瞬をもっと引き延ばそうとさえしたのだが何しろバスからの眺めなのだ、なすすべもなくそれは遠ざかり、というか、つぎの瞬間にはもう私の視界から消えてしまっていた。じっさいは杭のほうが固定されており、そこに近づき、そこから遠ざかったのはこの私なのに、まるで杭のほうこそが私に近づき一瞬私に認められ、そして逃げさっていったかのようなようだった—そう、図書館にひっそりと内蔵されて然るべき文学者の固有名が、弱い弱い固有名が、こんな苛烈な商いのジャングルをさまよっている、まさに独歩。

(「アダージョ」3前半 『反復彷徨』1992年思潮社刊行所収)

この部分から、「自分は何も書くことはないのだけれども、詩人のようでありたい、憧れの詩人と同じように何かに憑かれたように宇宙からのインスピレーションを得たい」とでもいうような切実な絶望感のようなものを感じとったことをよく覚えている。例えば萩原朔太郎『猫町』における〈迷いのための迷い〉のように。「なるほど、現代詩人というのは、ほんとうに何も書く主題がなく、それを見つけるために書く人もいるのか」などと感慨を持った記憶がある。当時僕はまだ『行け行けタクティクス』という詩集を出したばかりで、自分の進むべき道をまさに彷徨している頃であった。

けれども、その後も恵贈いただいた数々の著書のそれぞれの立派な装丁に感服しつつも、どうも彼の詩にのめり込むという風には進んではゆかなかった。そこには、予め読む気を失わせる何かしらの欠落感が蔓延していたのだ。いや、そんな難しい言い方は止そう。野村喜和夫の詩は僕には難しすぎたのである。

こういう自分自身の実感に、読書会メンバーや「Dawn Beat」の黙殺を感じて「やっぱりそうなのか、、、」という奇妙な親和感を持ったのだった。野村喜和夫と言

例えば1990年代以降「現代詩手帖」を引っ張ってきた代表的な現代詩人の一人である（はずである）。それに対して、この冷ややかな反応は何だろう。この思いが僕に本書『杉中昌樹詩論集 野村喜和夫の詩』を高速で読み進めさせた。

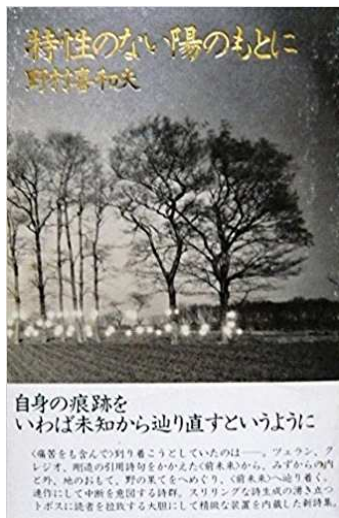
著者の杉中自身も野村喜和夫の詩の難解さに関しては意識的で、「序」の最初の部分から以下のように述べている。

現代詩は難解であると言われる。現代詩の本を読んでも何が書いてあるのかさっぱり判らない。だから現代詩は読まえないという危機的な状況にある。難解な現代詩の中でも、とりわけ難解な詩を書く詩人のひとりに、野村喜和夫がいる。野村の詩は難解である。人は野村の詩を難解であるというし、野村自身も自分の詩が難解であるということを自覚している。つまり、野村は難解な詩を書くべくして書き、その詩は難解なものとして受け入れられている。つまり、その点において、野村の詩は伝わっているのである。難解なものを書いて、それが難解であると受け取られる。それは書いたものがそのまま伝わっているということだ。

最後の方など苦しい限りで詭弁のようにさえ響くが、ともかく本書の主題は明確で、一般に読まれさえしない野村の詩集を丁寧に読み進めてゆこうという果敢な挑戦なのである。

2 女性把握のズレ

野村喜和夫の詩はよく分からないし、面白くない。しかし、この本はそんな野村の詩集を題材にしながらよくもまあ、ここまで面白く書けたなと思わせるほどにまで面白い。廢材からアートを作るようなものである。一種の天才である。杉中の焦点の当て方によって野村の問題点が浮き上がって見える。以下その見どころを紹介しよう。



たとえば杉中は「闇砂のなかで、ふたりで」という野村の作品（『特性のない陽のもとに』）に関して野村の詩の本質を語る。「野村の詩はセックスそのものである」「普通の女とのセックスではなく、大地そのものである」という風に解釈する。その詩は以

下のようなものだ。

むき出しの腰にみえない星をうならせながら
女を抱く
女を抱く
腰はいつのまにか地表をうちつけている
どんな沼になってあげようか
と地球も応えている
そして
あらゆる地表は女である
あらゆる女は言語である

パソコンに打ち込みながら読み返す。そうすると僕の場合、少し解釈がしにくいのは最後の2行である。それまでのところは、まあ杉中も書くように野外でセックスをしているのだろうということは大体理解できる。しかし「あらゆる地表は女である／あらゆる女は言語である」というのは分からない。それで改めて杉中の解釈を読むと、以下のようにある。

女の大地性。大地としての女。孕む者としての大地・女。孕むものとしての大地・女。だが、大地とは、生身の女のような、広がりや実体を持つものではない。…（中略）…何を孕み、産むのか。詩を、大地は詩人とのセックスによって詩を孕み、詩を生む。そのような場所である。詩人と詩を生む大地ガイアとのセックス。

僕は、杉中の上記の解釈の部分を読んではっと、これまで長く持っていた野村喜和夫の詩への異和の理由が分かった気がした。「目から鱗」という感じだ。野村の詩の中に、どこか吉増剛造的「不可視の領域」への憧れを感じつつも、「どうもキマッていない」という恰好の悪さを感じざるを得なかった、その理由。それは人間・野村喜和夫に対してではなく、純粹に彼の詩的言葉のセンスの悪さに対してである。言葉の規範や既成価値を乗り越えて新しい世界を射止めようとする詩人という立場でありながら、「孕む者としての大地・女」という発想を彼が持っているとするれば。それはまさに図式的・一面的な人間把握に他ならない。もちろん野村自身は「孕む者としての大地・女」という表現をとっているわけではないから、これに関しては決定的であるわけでもない。が、別の面からも同様のことは言えるのだ。つまり「あらゆる」地表「あらゆる」女というように、全てを十把一絡げに束ねる方法。「私を束ねないで」と言った新川和江の言葉を真逆でゆく表現志向。最近先述の「知る詩る」のために久しぶりに再読した西脇順三郎の中にも、同じような「女性蔑視」を感じた。しかし、西脇の時代とは違うのである。

普段は紳士的にふるまっているが、宴会になると豹変し「子供はまだ出来ないのかね？」というような発言を新婚女性に対して平気でする政治家がマスコミで叩かれたりする。現在では一般人の感性は以よりも敏感になっていて、鋭いツッコミを容赦なく浴びせかける。（僕はそれを全肯定・信頼するわけではないが）。

野村が政治家的だとか言うのではない。ただ彼の詩の中に、どこかそういうものに似た旧時代の感性の匂いを感じるのだ。そしてそれに気づかせてくれたのは紛れもなく杉中の批評であった。

ここで少し上記のことに関して補充的に語っておく必要を感じている。

僕は2016年の秋「戦後詩研究会」のシンポジウムを聞いた。その中で高良留美子が「かつてねじめ正一の詩が発表されたとき、その女性蔑視的な面を強く感じた」旨の発言をするのを聞いた。高良ほどの詩人が、フィクション性ということに関してその程

度の意識しかもっていないことに僕は大いに驚いたのだ。



またある合評会で僕の「女を買いました」という詩句に対して、年配の女性の何人かが、倫理性の欠落を強く指摘したことも思い出した。しかしそれは全くの創作で、詩句中の言葉を「書き手の倫理」と混同するのは詩の読み手として素人だと、感じたのであった。高良の発言も、年配女性の書き手たちも、表現の本質を勘違いしたズレた発想だと思ったのだが、「野村喜和夫における女性観の古さ」を云々した僕の上記の謂いが、それらと同質のものだと判断されることへの危惧を一瞬持ったのである。

だが、落ち着いて考えるとやはり根本的に違うだろう。僕は野村の倫理観の欠落を問題にしているわけでも何でもないからだ。野村の倫理観が歪んでいる、とかいう話ではなく、「大地、女、孕むもの」というありきたりな発想が「表現者として恰好悪すぎる」と言っているだけなのであるから。

もっとも繰り返すように、これが野村自身の言葉でない以上、「布教者としての」杉中にも何らかの責任がかかってくるだろう。淡々と描かれた批評である本書の書評に「超絶過激な批評集『杉中昌樹詩論集 野村喜和夫の詩』は、野村喜和夫を終わらせるだろう」というタイトルを付けたのはそのためである。杉中の解釈は説得力がある。その流れで読んでゆくと野村の問題点が手に取るようにはっきりと現れてくる。1冊の批評集を著すということは、その対象となる書き手の運命まで決してしまうことがある。事実この本を読んで、僕の中の野村喜和夫は瀕死の状態である。

3 詩論のズレ

本書末尾近くにある「野村喜和夫を読むためのキーワード」という章の中に「詩」という項目がある。以下に全文引用しよう。

詩とは、まず文法という制度の破壊である。文法は破壊されねばならない。詩によって文法が破壊されること。それは、国語内における翻訳である。ある文法に従って書かれる文を、文法の破壊され全く新たな文法による文に変換すること、この翻訳が詩である。詩において文法は破壊され、新たな文法が生まれる萌芽となる。詩は新たな文法の創造に関わっている。それは国語内において、別の国語が成立するということである。国語が、新たな文法を獲得する。詩は新たな風景を私たちに見せてくれるだろう。言葉が、配置され、播種され、分散された状態。それは言葉の風景の異化である。言葉が、異質なものとして、新たに獲得される。そのように新たな言葉が撒き散らされて、風景が変

化する。国語という言葉の風景が変化し、異化される。それが詩である。

何と古い詩観だろう。これは大正時代末期の前衛詩たちが考えた脱日常の方法としての詩論に過ぎない。この中で言っていることが全て価値を失ってしまっているわけではもちろんない。詩が、日常と異なる世界を創り出す。これはむしろ本道である。本道であるということは、すなわち「文法が破壊される」ということそのものが現在では「詩の文法」と化してしまっているということである。その証拠に現代詩手帖をはじめとする詩雑誌や、投稿欄等には意味不明な奇妙な語群が騒めいている。詩は意味が分からなくていいと思いついでいるのだ。これからの詩は、その「固定化してしまった詩の文法」を破壊しなければならないのだ。杉中が言っている詩論というのは、形式としては正しいが、現在においては全く逆の意味合いにしかなり得ない。2017年現在において本当に意味を成すためには、次のように書き直さねばならない。

詩とは、まず文法という制度の破壊である。と言われたことがかつてあった。文法は破壊されねばならない。詩によって文法が破壊されること。それは、国語内における翻訳である。ある文法に従って書かれる文を、文法の破壊され全く新たな文法による文に変換すること、この翻訳が詩である。詩において文法は破壊され、新たな文法が生まれる萌芽となる。この意味で、「破壊詩観」がもてはやされたことがあった。これは必ずしも全面的に間違っているとは思われない。というのも以下のようなことは現在においても事実否定する必要はないからだ。すなわち「詩は新たな文法の創造に関わっている。それは国語内において、別の国語が成立するということである。国語が、新たな文法を獲得する。詩は新たな風景を私たちに見せてくれるだろう。言葉が、配置され、播種され、分散された状態。それは言葉の風景の異化である。言葉が、異質なものとして、新たに獲得される。そのように新たな言葉が撒き散らされて、風景が変化する。国語という言葉の風景が変化し、異化される。それが詩である。」しかし、今や、右のようなことはあまりにも当たり前になってしまった。すなわち「文法を破壊することが詩だ」という文法があまりにも強固にできあがってしまったのだ。新しい詩人にとってはその「破壊文法」自体を見直し、新たな形態を模索することそのものが、詩的営為の第一義として現在の課題としてここに存在しているのだ。

ここで三たび僕は、先に引用したものの杉中の「野村喜和夫詩論」であって、野村自身の発言でないことを確認しておかねばならない。僕は、野村が詩において「文法は破壊されねばならない」などと思っていないことを期待する。野村は杉中も指摘するように所々で、詩とはあまり関係のないような「小泉今日子」を作中に持ち出したり、さまざまな俗っぽい言葉や表現を用いたりしている。これなど、喩の樹海に迷い込んでしまったがごとき現代詩にある種の突破口を見出そうとするささやかな試みのようにも思われる。しかし、野村の詩の全体像を読む限りにおいては、残念ながら杉中の書いていることが大きく外れているとも思えない。

00 おわりに

「今回の野村喜和夫の読書会、あまりみんなの反応はよくないかもね」という事前の予想を遥かに超絶に上回る「拒絶感」や、「Dawn Beat」の会での「黙殺」に後押しされて杉中の本を一挙に読み干し、短く感想をここに記した。

最初に触れたように杉中昌樹は、野村喜和夫に「子供詩」のような分かり易いものを書いてほしいと個人的に考えている。たとえば谷川俊太郎のように。しかし、僕にはそ

れはナンセンスにすら思われる。どうせここまで分からないものを書き続けてきたのならば。今後も「独歩住居跡」ならぬ「現代詩廢墟記録」としての不毛さを突き詰めてゆくしかないのだろう。

いましがた僕は、「野村は杉中も指摘するように所々で、詩とはあまり関係のないような小泉今日子を作中に持ち出したり、さまざまな俗っぽい言葉や表現を用いたりしている。」と書いた。なんだか秀才が無理して受けを取ろうとしているような感じにも思われて僕は、「痛い」思いで一杯になる。そのことを考えていると僕が詩を読み始めたころ、北川透の詩を読んで、同じような思いをしたことを思い出した。本稿で少し触れた西脇（これは、女性への旧姿勢という点で僕は挙げたのだったが）を含めて、こんな系譜はどうだろうか。

西脇順三郎→北川透→野村喜和夫

詩人という存在に憧れを強く持ち、しかし詩的センスの欠落から突破口を見出せないままに蠢く秀才たちの魂の系譜。難しげに見える批評や詩論のバックアップによって一見恰好良く見えるけれども、その実激しくありふれた感性が垣間見られる。そんな「詩人」と呼ばれて来た者たちの実質を直視しなければならない場所に本書『杉中昌樹詩論集 野村喜和夫の詩』によって僕は導かれた。

了